

忘年会やクリスマス、お正月など、たくさんのイベントを控え、新型コロナウイルス感染者数が加速的に増えておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

普段会えない人たちと会食するのは楽しいですし、つついとお酒を飲むペースも上がってしまいますよね。恥ずかしくて大声では言えないかもしれませんが、話に夢中になり気付いたら膀胱がパンパンなケース、ありませんか？しかもいざトイレに行こうと思ったらトイレ待ちが数人。悲惨ですよ。今回はそんなおしっこに関するお話です。

尿閉（尿道閉塞）という病気をご存知でしょうか。尿閉とは、腎臓で作られた尿が膀胱まで運ばれ溜まったものの、排尿したくても尿がまったく出せないという状態です。先ほどの話に戻りますが、やっとなおしっこの順番が

回ってきたにもかかわらず、まったく尿が出ないとしたら、恐怖でしかありません。

2021年の1年間に、当院を来院した犬猫のうち、尿閉と診断ないし仮診断された症例は、91 症例でした。内訳として、猫は犬の5倍以上も多く、0歳から17歳まで多岐にわたるものの、性別はほぼ雄という結果でした。

教科書的にも、雄猫では下部尿路疾患に伴う尿閉に関連する排尿困難が最も多いといわれており、雄猫がいるご家庭では注意が必要です。排尿困難を引き起こす主な原因として閉塞や外傷、神経的なものが挙げられますが、中でも尿道内の結石や栓子（血餅や炎症産物など）による閉塞によく遭遇します。

実際に尿閉になるとどうなるのでしょうか。閉塞時間

尿閉

~ちゃんとおしっこ出てますか？~



文 伊藤 和人
text by Kazuto Ito



によりますが、行き場を失った尿は腎臓に負担を強い、数時間から半日ほどで急性腎障害、致命的な不整脈へと進行します。意識レベルが下がっているようであれば待たなしの状態です。超音波検査や血液検査等で状況を評価しつつ、速やかに尿閉解除のためにカテーテルを挿入し排尿を試みます。排尿したくてもできない雄猫の尿道にカテーテルを挿入するのは、雄猫の苦痛を伴う作業であり、どうしても難しい場合には針で膀胱を刺す場合もあります。

頻繁にトイレに行き来する、トイレで排尿姿勢をとるも尿がポタポタとしか出ない、異様な声で唸っているなどの行動が見られ、さらには尿石症や膀胱炎の既往歴がある場合は速やかに動物病院に連れて行きましょう。多頭飼育の場合、気付きにくいこともあります。異変に気付けるかどうか大事な家族を守る一手となりますので。

年末年始、どうぞお気をつけてお過ごしください。



Profile

獣医師
1986年埼玉生まれ。2011年日本大学 生物資源科学部 獣医学科を卒業。横浜のMOMOどうぶつ病院、国立のふく動物病院にて一般臨床を学んだ後、2016年現職であるTRVA動物医療センターに就職。臨床と診療支援の間に立ち、日夜奮闘中。趣味：音楽鑑賞、カメラ